

学生サポーター派遣事業に関する研究 (1)

— サポートニーズ調査と事前教育に関して —

神澤 創・佐脇 亜依・大畑 豊*

はじめに

心理的地域支援活動の中でも小・中学校など教育現場におけるニーズはきわめて高い。スクールカウンセラー事業の開始から10余年が経過し、現在、全公立中学校へのカウンセラー配置が進められており、小学校や高等学校、幼稚園などへと派遣の範囲はさらに拡大を続けている。また平成19年度から本格化した特別支援教育の一環として、特別支援員などカウンセラー以外の支援スタッフが地域の学校に派遣され、いまや学校現場における外部支援スタッフの活動は欠かせぬものとなっている。また、これらの支援スタッフは臨床心理士や教職免許など専門的な資格の所有者だけではなく、高齢者や学生など地域の有志が様々な形でサポート活動に参加している。

そのような流れの中、大学と地域が連携し、大学生や大学院生を学校に派遣する事業も増加してきた。なかでも、学生サポーターが教室で児童生徒と直接関わる、いわゆる「入り込み型」の活動は今日では日常的なものとなりつつある。その背景には先に述べた特別支援教育の影響もうかがわれ、その推進の一因となった文部科学省の調査がある。

平成14年に文部科学省が全国の公立小・中学校教員を対象に行った調査において、「学習障害(LD)、注意欠陥／多動性障害(ADHD)、高機能自閉症等、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒は全体のおよそ6.3% (文部科学省, 2002)」と報告された。教職員だけでそれらの児童に対応していくには相当な困難を覚悟せねばならない。また、発達支援という視点で考えるなら、適応上の問題をできるだけ早期に発見し、しかるべく対応することによって、いじめなどの二次障害を予防し、発達の可能性をひろげてゆく必要もあろう。このような学校現場の状況が教職員と連携した準専門的なスタッフとしての学生サポーターの活動に対する期待を高めているものと推測される。

* 学生サポーターの特徴

学生サポーターは他のスタッフに比して児童・生徒と年齢が近く、心理的な距離も近接しており、この点は支援技術や経験の不足を補う特徴といってもよいであろう。少子化の進行に伴う同胞数の減少や、地域社会における異年齢集団との接触機会に乏しい今日、大学生は子どもたちのもっとも近くにいる大人のモデルとなりうるかもしれない。また、地域貢献を通じて学生の臨床教育を行うというメリットも大きい。これに関しては、帝塚山大学(以下、本学)が文部科学省の支

援（現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム；現代GP）を受けて推進している事業と軌を一にするものである。学生たちは教育の現場で子どもたちと直接かかわることにより、単なる知識としてではなく、実際の体験を通じて学ぶ機会を得ることができるのである。

これらの長所を持つ反面、学生サポーターの役割の曖昧さが効果的な活動の妨げとなっているという意見もある。なかには、教員のアシスタント（「教員補助員（松見，2006）」）として組織的に活動しているケースもあるが、多くは校務分掌の中に位置づけられる

こともなく、学習支援や心理的支援など必要に応じて個々の現場のニーズに即した役割の遂行を求められているというのが現状であろう。また、TA（Teaching Assistant）や学習支援員などの名称で教員志望学生がIT教育などの教科指導の支援に入っている例についてはいくつかの報告（八木，2007）もなされているが、特別支援や不登校などの問題を含めた児童・生徒の全般的な心理的支援を標榜して学生を派遣している例はあまり報告されていない。

筆者は過去数年にわたる実践活動を通じて、学生サポーター派遣事業における、ニーズ調査・事前研修・活動内容のスーパーバイズがいかに重要であるかを痛感してきた。また筆者の活動は臨床的・個別事例的な活動が中心であり、これら一連の作業を組織的にやり、実証的な調査を行う機会を得なかった。また、従来の派遣活動が個別の依頼に応える形のどちらかといえば「受身的・消極的」活動であったのに対して、事前に必要な学習を行い、派遣後もスーパーバイズ態勢を確保する「能動的・積極的」な活動を計画的かつ継続的に行うことが支援活動の効果をより高めることはいうまでもない。今回のニーズ調査はその第一歩と位置づけられる。

これらのことを受けて、本研究では心理的支援を主眼とする学生サポーター派遣活動をより効果的に進めるために、学生を受け入れる教育現場のニーズを調査し、それに基づいた事前教育のあり方を検討することを試みた。

＊「学びのサポーター派遣事業」— I 市の取り組み—

ここで、本研究の調査フィールドとなった I 市における学生サポーター派遣事業について略述する。

I 市教育委員会では、市立小学校児童の学習活動を支援するため、様々な施策を積極的に推進し、教育内容の充実を図ってきた。本事業が開始される数年前から、I 市内の保育園（I 市中保育園）や児童施設（子どもサポートセンター）、適応指導教室などにおいて本学学生がボランティア

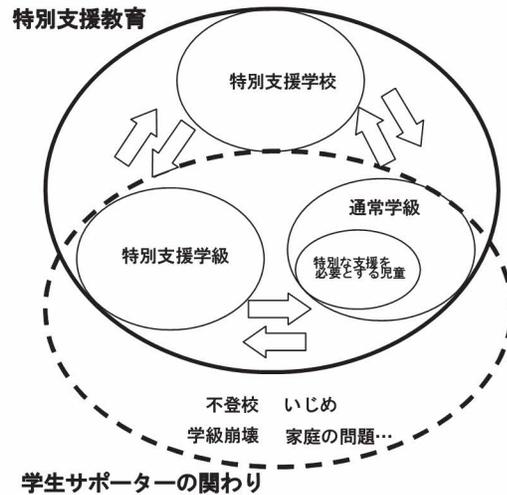


Figure 1. 学生サポーターの活動範囲

学生サポーター派遣事業に関する研究（1）

アとして活動しており、同市と本学の連携の素地は十分に形成されていたといえる。また、平成18年度後期には大学院生3名が先駆的に小学校に派遣され、これと並行して大学院生を対象に事前研修（現地視察など）やスーパーバイズも開始された。

平成18年8月28日、「幼児・児童・生徒の生活及び学習活動を支援する学生ボランティア活動を積極的に推進し、それぞれの教育を充実させる」ことを目的としてI市と本学の提携協定が締結され、I市教育委員会より翌19年度の新規事業として始められる「学びのサポーター派遣事業」に本学学生への協力要請があった。本調査の対象となった事業はこれにあたる。

学生派遣までの流れは以下のとおりである。

◇学びのサポーター派遣までの流れ

- ① 本学「PW推進室」で「学びのサポーター」派遣希望学生を募集し、I市教育委員会が作成した「登録カード」に活動希望地域・施設・内容・曜日・時間帯などを記入させ、市教育委員会に伝達
- ② I市教育委員会で派遣希望校と学生の調整（マッチング）を行い、派遣先校を決定
- ③ 大学の関連教員が学生を伴って派遣先校を訪問
- ④ 活動開始

・派遣学生募集要項

I市教育委員会の作成した学生募集用文書（チラシ）には、サポーターの活動内容として「学習活動の支援」、「学力補充のための指導補助」、「学校行事の指導補助」、「クラブ・部活動の指導補助」、「障害のある子の介助補助」、「情報教育の指導補助」が挙げられ、各校の教職員と共に児童の学校生活や学習活動を支援していくことが明記されていた。

また、活動は週2回、1日3時間を基準とし、1校に2名が派遣される場合は、2人でその規定を満たすように活動を行うこと、活動には謝金が支給され、万一の事故に対応するための保険にも加入することなどが取り決められていた。なお、I市全体で25名のサポーターが派遣され、本学以外の大学からも学生が動員されている。

目 的

本稿では、1）派遣先校の教職員と派遣学生、双方のサポート活動に関するニーズ調査、および2）派遣学生への事前研修について報告し、今後の学生サポーター活動の在り方を検討する。

1. サポートニーズ調査

方 法

調査対象

学生サポーターの派遣を希望した I 市内の小学校 7 校の教職員 127 名 (m=47, f=77, 不明=3 ; 回収率 54.8%) および、I 市の「学びのサポーター派遣事業」にボランティア登録している大学生および大学院生計 39 名 (m=18, f=21 ; 学部生=33, 大学院生=6) を調査の対象とした。

質問紙

本調査のために筆者らが作成した質問紙「学生サポーターの活用（活動）に関する事前調査」を用いた。

「学生サポーターの活用（活動）に関する事前調査」について

教職員及び派遣予定学生を対象として、学生サポーター活動に対する要望（ニーズ）に関する調査用紙を作成した。多肢選択法と自由記述法で構成された質問項目の内容は教職員、学校長、学生の 3 者それぞれに適するよう部分的に改変されている。以下にその内容を示す。

「教職員向け質問紙」は、①学生サポーター活用経験の有無と活動形態②学生サポーターの必要性③希望する活動内容と形態④希望する活動時間と人数⑤学生サポーターへの注意事項⑥学生サポーターに関する疑問・意見（※⑤⑥は自由記述）、に関する項目で構成され、「学校長用」はフェイスシートに児童数や教職員数など学校の概要を記入する欄を設け、学生サポーターの活用経験の有無については割愛した（付録 1. 参照）。

「学生用質問紙」では、①希望する活動内容と形態②希望する活動日数と時間③参加動機④活動を通して学びたいこと⑤活動における不安や疑問（※③④⑤は自由記述）を尋ねた。

なお、活動内容・形態に関しては 3 者に共通した項目（内容に関する 8 項目；「学習指導」、「クラブ活動」、「学校行事」、「障害児」、「不登校児・別室登校児」、「気になる児童（例：教室を飛び出してしまう/感情のコントロールが難しい/友人関係でトラブルがある/家庭に問題を抱えている児童などへのサポート）」、「心理面（例：休み時間に相談室や秋教室を開放して、児童の相談にのったり、話したり、遊んだりして過ごすなど）」、「その他」：形態に関する 4 項目；「クラスへの入り込みによる対応」、「別室・相談室での対応」、「登下校支援」、「その他」）で構成し、複数回答を可能にした。

手続き

調査期間：200X年5～6月

教職員の調査：I市教育委員会を通じて学校長に調査を依頼し、学校ごとに質問紙を配布した。

各教員には学校長が調査の説明と配布・回収をおこない、記入済みの調査用紙は筆者が各校を訪問し、回収した。

学生の調査：サポーター派遣を希望する学生を対象に本学で行われている事前研修において、調査の趣旨を説明した後、その場で記入させた。

結 果

回答者の属性

1. 学 校

調査協力を得た7小学校の児童数は各校平均563名（19学級）であり、障害児学級在籍児童数は各校平均9名（4学級）であった。「気になる児童数」に関しては、学校により2～100名までとかなり広い範囲の数値が得られた。

2. 教職員

年齢構成は「40歳代」、「50歳代」の教師が過半数（72%、91名）を占め、経験年数は、「20年以上」が55%（70名）、以下、「10～20年」18%（23名）、「5年未満」13%（17名）、「5～10年」4%（5名）であった。また、校内における役割は「担任」が61%（78名）、「特別支援学級担任」が7%（9名）であり、その他、学校長・教頭、養護教員、加配教員、少人数指導担当や専科の教職員などであった。

3. 学 生

平均年齢は21歳、所属は「心理学科」27名（69%）、「地域福祉学科」5名（13%）、そして「人文科学研究科臨床社会心理学専攻」の大学院生が6名（15%）であった。また、多く（85%）は学生サポーターの活動経験がなかったが、活動経験のある学生6名中、5名は事前に2年以上の経験を有していた。

【各質問項目への回答】

質問紙への回答を教職員・学生の順に記述する。なお一部、両者の比較を行う形式で記した箇所もある。

* 教職員用質問紙の回答

① 学生サポーター活用経験の有無と活動形態

学生サポーターの活用経験をもつ教職員は全体の25%（33名）、活動内容の67%が「1. 学習

指導のサポート」であり、次いで「6. 気になる児童のサポート」(24%)が挙げられた。活動形態として、ほとんど(97%)が「クラスへの入り込み」を選択し、自由記述部分「教職員が感じた学生サポーター活用の利点(良かった点)」では、「個別支援の充実」「スムーズな授業進行」「安全面の確保」、パソコン指導など「学生の専門性の活用」、また、「児童との関係の作りやすさ・児童と向き合う姿勢」、「児童の対人交流する機会の増加」等であった。一方、「改善点」としては、「学生サポーターの未熟さ」「活動回数や時間調整の難しさ」「学生サポーターの役割の不明瞭さ」「担任との連携不足」等が挙げられた。

Table 1. 学生サポーター活用経験をもつ教職員の回答

良かった点	改善点を希望する点
<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別支援の充実、複数による対応が可能 「複数の目で子ども達と接することができ、安全面で助かった」「パニックになったり、トラブルが起こった時のクールダウン」 ・ 児童と年齢が近く親しみやすい存在 「子どもに近い目線で接してくれるので、親しみやすい」「子どもにとって、人と関わる機会が増え ・ 学生の専門性の活用 「パソコン指導において、専門的な知識で対応してもらえて安心して指導できた」「吹奏楽部での楽器レッスンの活動 ・ 社会資源として活用するメリット 「謝礼が通常より少なめ、気軽な感じ」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童への対応スキルの未熟さ 「児童とどう関わったらよいのか理解していない場面があった」「だめなものはだめというしっかりとした態度をとれるサポーターが少ない」 ・ 活動回数や時間調整に関する問題 「来校される回数が限られているので、継続的にできれば」「サポートの時間、人数等に限りがある ・ 学生サポーターの不明瞭さ 「何をどこまで任せられるのかが、はっきりつかめない」「大変な場面には対応してもらえないのが残念」 ・ 担任との連携不足、話す時間の確保が困難 「担任とゆっくり話す時間がない点」「事前に打ち合わせをしておいた方がよかったと思う」

② 学生サポーターの必要性

教職員のうち74%が学生サポーターの活用を必要と回答した(「かなり必要である」17%、「必要である」57%、「あまり必要ではない」9%、「全然必要ではない」3%、無記名13%)。また、その理由として、「配慮の必要な児童の増加」や「人手不足」、「複数の人が児童と関わる必要性」、「担任の目が離れる時間における児童との関わり」等が挙げられ、一方「必要でない」理由として「学生サポーターの役割の不明瞭さ」や「クラスの安定」、「教諭や講師であれば必要」等が挙げられた。

③ 希望する活動内容と形態(学生用では質問1)

希望する活動内容と形態については学生用質問紙と同一の内容であるため両者の比較という形式で記述する。

学生サポーター派遣事業に関する研究 (1)

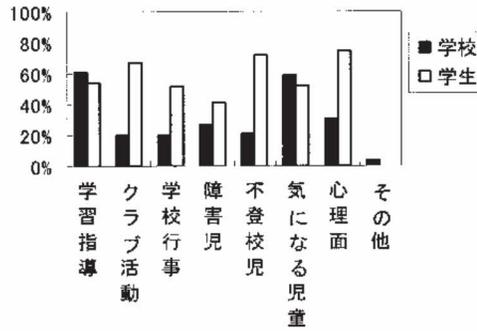


Figure 2. 希望する活動内容

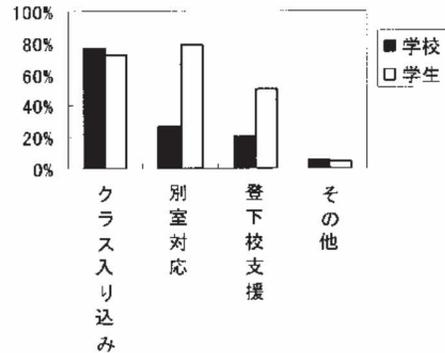


Figure 3. 希望する活動形態

・「活動内容」について

多くの教職員は「学習指導のサポート (61%)」や「気になる児童のサポート (59%)」を望んでおり、学生は「心理面でのサポート (74%)」、「不登校児・別室登校児のサポート (72%)」、「クラブ活動のサポート (67%)」の希望が多かった (Figure 2.)。なお、学生はいずれの内容においても40%以上の値を示した。

・「活動形態」について

教職員では「クラスへの入り込みによる対応 (76%)」が突出していたのに対し、学生では「別室・相談室での対応 (79%)」、「クラスの入り込みによる対応 (72%)」の間に顕著な差はなく、「登下校支援 (51%)」も過半数が選択していた (Figure 3.)。

学生は活動内容・形態ともに内容と関わりなく広く希望しているが、教職員は特定の項目に希望が集中した。そのため、活動内容では「クラブ活動のサポート」、「不登校児・別室登校児のサポート」、「心理面でのサポート」に、また活動形態では「別室・相談室での対応」と「登下校支援」において教職員と学生の希望 (ニーズ) の違いが顕著にみとめられた。

④ 希望する活動時間と人数 (活動の頻度)

教職員の32%が「毎日」、29%が「週1~2回」、27%が「週3~4回」、の活動を希望し、学生は大学の授業の都合などを理由にほぼ全員 (97%) が「週1~2回」の活動を希望した。なお同一時間帯に必要とされる学生数は、半数以上が「1人 (54%)」、以下「2人 (23%)」、「3人以上 (7%)」であった。

⑤ 教職員の学生サポーターへの希望

教職員の学生サポーターに対する希望 (自由記述) をKJ法で分類した結果をTable 2.に示す。まず、全体を学生が児童と関わる際の心構え (支援姿勢) と具体的な関わり (支援方法) に分類し、さらに、児童との全般的な関わりを重視した指導的な視点 (全体・指導的側面) と、個

別での関わりや児童との関係を重視した視点（個別・受容的側面）から、学生サポーターへの希望を分類した。その他、「守秘義務」や「学校との連携」などの回答もあった。

Table 2. 学生サポーターに気をつけてもらいたいこと

	全体・指導的側面	個別・受容的側面
支援姿勢	指導者としての自覚 教育現場である意識	児童との関係を重視 学生の人間性（誠実さ、積極性等）
支援方法	はじめ・児童との距離感 言葉遣い クラス全体を意識したサポート 意欲・自主性を引き出すサポート	児童の目線に立ったサポート 児童としっかり向き合う 児童のつまづきへの気付き 休み時間の関わり
その他	守秘義務 担任・学校との連携／学校の体制作り	

⑥ 教職員の疑問・意見

教職員の学生サポーターに関する疑問や意見（自由記述）は、「学生サポーターへの期待や感謝」、「学生サポーターに対する疑問」、「派遣体制に対する意見」の3つに大別することができた。まず、学生サポーターへの期待や感謝として「助けて頂いた分、精神的なゆとりが持てる」、「子ども達と年齢が近いのでよく遊んでもらいたい」、「学生自信の為にもなるので、ぜひ参加して欲しい」等が挙げられる。そして、学生サポーターの派遣に関して教職員は「学生サポーターの目的は何か」、「実際にどのような活動が可能なのか」、「学生はどんな学習を経てきているのか」等の疑問を持っていた。さらに、派遣体制について「現場や子どもにプラスになるような体制にして欲しい」、「サポートを依頼できる時間や人数に制限がある」、「単位のためではなく、本当に熱意のある学生なのか疑問」等の意見があった。

また、上記とは別に、学校長より、「成長過程にある学生は人格的に未熟な部分もある」ため、派遣に「学生サポーターの変更が可能な（途中でも断ることが出来る）体制作り」や事前に学校側の管理職が大学関係者から「学生の情報を得る機会」、「学生と面談する機会」を希望する意見が挙げられた。

* 学生用質問紙の回答

※①②については教職員の項で既述

③ 参加動機

「子どもが好き」、「様々な経験を積みたい」、「地域貢献」や「将来の職業選択」を視野に入れた回答等が挙げられた。

④ 学びたい内容

多くが「小学校の現状を知り、児童との関わり方や教職員との連携の仕方、幅広い視点等を

学びたい」と回答した。

⑤ 学生の不安

学生の活動前の不安には、児童や教師との関係や学校の方針、大学の授業やクラブとの時間調整といった「活動の枠組みや学校での関係作りに対する不安」、と、臨機応変に対応できるか、コミュニケーション能力の低さ、自分の適性といった「自分自身への不安」等があった。

考 察

本調査の結果より、希望する「活動内容・形態」に関して、教職員と学生のニーズに差異があることがあきらかとなった。とくに「心理面」、「不登校・別室登校」、「クラブ活動」など活動内容における違いは顕著である。

教職員のニーズが「学習指導」や「気になる児童」など教室における直接的支援に集中しているのに対し、学生ではそれらを含め、授業と直接関係のない課外活動や心理的な相談、不登校児童へのサポートといった支援内容に分散していた。実際の活動が始まる前に調査したことや複数回答式で答えさせた影響もあろうが、学生は教育現場の状況を把握しておらず、いわば理想的な活動のイメージを語っているわけであるから、現場教員の希望とのギャップがあるのは無理からぬことではある。また、今回の調査対象が心理・福祉系の学生に集中していたことも大きい。学生たちは、教師的な役割よりもむしろ「カウンセラー」に近い役割での活動を期待していたのかもしれない。そして、今後の活動を考える上で、このことは否定的にのみとらえられるべきではなかろう。というのも、サポーターはあくまで外部からの支援者であり教職員ではない（この点はスクールカウンセラーと類似している）のであるから、児童と接する際、教職員とは異なる視点で接していくことが役立つ場合もあるかもしれない。

とはいえ、このギャップが実際の活動においてどのように埋められていくかは重要である。活動を通じて学生たちが現場の実際的なニーズに気づき、それぞれの場でなすべきことを行ってくれることを期待したい。そのためにも、事前教育において、この事実を学生たちに十分に理解させておく必要がある。

2. 事前研修について

実際の活動に入る前に学生サポーターの支援活動をより円滑かつ効果的に実施する目的で、派遣予定の学生を対象に事前研修をおこなった。以下にその概要を示す。

・講師

事前研修の指導はY市教育サポートセンターにおいて学生派遣事業の活動経験を有する臨床

学生サポーター派遣事業に関する研究（1）

心理士に依頼した。また、Y市での活動を通じて得られた所見を元に学生サポーター派遣活動の基本となる事項をまとめた「サポーターハンドブック（以下、ハンドブック）」を作成し、事前教育の指針とした。

・期間

派遣前年度後期（200X年1月）より、派遣開始（200X年6月）まで概ね週1回のペースで実施した。学生には事前研修への参加が派遣の前提となっていることがあらかじめ伝えられた。

・参加者

毎回ほぼ30人前後の学生が参加し、これにPW推進室の講師（2名）及び関係教員（1名）が随時補助的に参加した。

・研修内容

毎回のプログラムは、18:30～19:00講義、19:00～19:30ワーク、19:30～20:00 架空の事例検討、という枠組で進められた。

なお、過去における筆者らの活動経験から、派遣学生・受け入れ側の学校双方が満足した事例における学生（成功事例学生）の特徴として以下の所見が得られており、研修内容はこれらを参考にして組み立てられた。なお前年度から継続して派遣されている学生については、事前研修と並行して、週末などに同講師によるスーパーバイズが行われた。

◎成功事例学生の特徴

- ① 継続性：継続して活動が続けられること
- ② 柔軟性：状況に応じて柔軟に学校側の要求に対応ができること。突拍子もないこと以外は、学校側のニーズに不満なく対応できること。活動がこうでなければならぬと強く思いこんでいないこと
- ③ 自然なかかわり：たいていの子どもと楽しく遊べ、話し、関わるができること。カウンセリングなどの専門的な関わり方ではなく、学生の個性が発揮できるような自然な関わりが出来ている学生の方がよさそうなこと
- ④ 報告・相談：突発事態を学校側に報告・相談できること。独断的な判断をせず、抱え込まず、周囲に相談できること
- ⑤ マナー：教員や保護者と話す上での最低限の礼儀を守ること

上記の所見に基づいて、事前研修会では以下の項目が重視された。

- 1) ルール遵守の徹底：研修への参加が派遣の前提条件であることや、遅刻・欠席時の連絡などのルールを守ること
- 2) グループワークなどで「遊ぶ」、「関わる」、「支援する」などの状況を作り、体験を通し

て考え・学ぶこと

- 3) 架空事例を検討し、自他の考えを比較・共有しながら意見をまとめ、発表（人前でしっかりと話す）すること
- 4) 活動への不安の軽減：学生が抱きやすい困惑や不安（「どうすればいいのか?」「やっていて意味があるのか?」など）への対処（ストレスマネジメント）

◎期待される効果

筆者らが期待した事前研修の効果は以下のとおりである。

- ① 派遣先での活動に関するイメージ作りと不安軽減
- ② 活動後にも有用に働くと考えられ、活動内容の相談や意見交換などが可能となるグループワークなどを通じた学生同士の関係作り
- ③ グループワークに積極的に参加し、かつ他者を尊重できるような学生自身の意識の変化やソーシャルスキルの向上

なお、派遣事業は進行中であり、上記、事前研修の効果については稿を改めて報告したい。

おわりに

本稿執筆時にはすでに派遣活動が開始されており、いくぶんかの実践報告も入手できていることから、本稿を終わるにあたり、それらの知見をもとに問題点を整理しつつ、今後の課題について若干の検討を試みたい。

教職員と学生のニーズには温度差があり、情報交換をする機会（時間）が確保されないことが円滑な活動を妨げる場合があった。したがって、当面の解決課題は、派遣先校と派遣側の事前の情報共有の問題と考えられる。なかには、派遣先校が学生サポーターを教育実習生のようにとらえて過剰な期待をいだくケースや、活用の方法が分からず依頼や指示がまったく学生になされない場合も見受けられた。その様な事態に対処するため、ハンドブックを作成し、事前に学校に配布していたのではあるが、文書だけでは情報伝達が十分ではなかったであろう。また、派遣前に関係教員が学生本人と学校を訪問することを心がけていたが、その際の説明が十分でなかったとの憂いはある。学生サポーターの役割は活動を通じて理解される部分が大きく、派遣する側とされる側の両者がお互いを理解するまでの時間（経験の蓄積）が必要なかもしれない。次年度の派遣においてはこの点を徹底してゆきたい。

このほかニーズ調査でも指摘されていたことではあるが、「頭髮の染色」や「教室での不適切な行動」などに関する学校側からのクレームや「担任教師との関係作りの困難性」、「体育授業においてプールに入るかどうか」などの個別具体的な問題が提起された。筆者らはそのつど、教職員や市教育委員会と相談の上で解決に当たってはいるが、今後もこのような問題への対応が求め

られることはあろう。スーパーバイズのあり方をさらに吟味してゆく必要を感じている。

・地域特性と他地域への展開

本活動は大都市近郊にある人口10万人程度のI市を舞台に展開された。元来、教育に熱心な土地柄を考慮するなら、当然のことではあるが、今回の試みを都市部など人口密集地域（とくに、困難な課題をより多く抱えている地域）にそのまま適用することは難しいかもしれない。またそれは過疎地域においても同様である。しかしながら、学生サポーターを学校・園に派遣する際の基本的な枠組み（ニーズ調査→事前研修→スーパーバイズという一連の流れ）は地域によって大きく異なるものでなかろう。教育現場へのアクセス（物理的距離と現場教職員との連携）が可能な範囲内に大学が存在し、心理・福祉系の学部・学科を擁する大学であれば同様の活動はさらに容易である。本稿を現在、各地で類似の活動を展開しておられる諸大学や、今後学生サポーター派遣事業を予定しておられる地域の参考に供することができれば幸いである。

本稿では学生サポーター派遣のニーズ調査と事前研修について報告したが、今後は派遣先の学校・園および派遣学生双方における派遣の実際的な効果について調査・検討し、その知見を次なる活動に反映させることによって教育現場への学生サポーターの派遣をより充実したものに発展させてゆきたい。なお、今回使用した調査資料の一部は応用心理学会第74回大会において発表したものを加筆修正したものである。

引用文献

- 上村逸子・森山貴司・高橋順治・中川恵美子・西本麻衣（2006） アンケート調査からみた個々のニーズに対応した教育的支援の現状－I市内の小学校を中心として－ 大阪教育大学障害児教育研究紀要, 29, 37-46.
- 阪根健二（2006） 学校ボランティア活動の実態と課題 香川大学教育実践総合研究, 13, 15-22.
- 高橋 興（2007） 学校支援ボランティアの現状と課題 生涯学習研究（宮崎大学生涯学習教育センター研究紀要）, 12, 35-49.
- 独立行政法人国立特殊教育総合研究所（2006） プロジェクト研究報告 小・中学校に在籍する特別な配慮素必要とする児童生徒の指導に関する研究－LD, ADHD等の指導法を中心に－
- 奈良市特別支援教育検討委員会（2006） 奈良市の特別支援教育のあり方について－最終報告－
- 松見淳子（2006） 大学・地域と連携した学校支援の応用行動学的モデルの検討 人文論究 第56巻 第2号 関西学院大学人文学会
- 松見淳子（2006） 不適切な行動や考え方を变える－認知行動療法
- 文部科学省（2002） 「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」調査報告
- 文部科学省（2007） 平成18年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」調査報告
- 八木美保子（2007） 平成18年度「東北大学学校ボランティア」活動報告 一大学生による社会体験活動の教育効果の検討－教育ネットワークセンター年報, 7, 105-122.

教職員の皆様

学生サポーターの活用に関する事前調査

日頃から本学の教育に対してご理解を頂き、ありがとうございます。この度、帝塚山大学の心理・教育推進室では、生駒市と提携を結び、生駒市の小学校に本学の大学生・大学院生(以下、"学生サポーター")を派遣し、それぞれの学校のニーズに応じた活動を展開していくことになりました。学生サポーターの活動は、児童への学習面や心理面のサポートなど多岐にわたります。

そこで、本調査において学生サポーターの活用に関する先生方の率直なご希望やご意見を伺かせいただき、それを学生サポーターの有効な活用に結び付けていきたいと考えております。つきましては、お忙しい中、お時間をとってもらうことになり恐縮ですが、御協力よろしく願います。なお、調査結果につきましては学生サポーターの活用を検討する目的のみを使用させていただきます、個人情報や特定の先生のご意見のみを取り上げて話題にしないことをお約束致します。

調査に先立ち、以下の項目にお答え下さい。当てはまる項目を○でお囲み下さい。

性別 (男性 ・ 女性)
 年齢 (20歳代 ・ 30歳代 ・ 40歳代 ・ 50歳代 ・ 60歳代)
 教師経験年数 (5年未満 ・ 5～10年 ・ 10～20年 ・ 20年以上)
 学校における役割
 (担任 (年生) ・ 養護教員 ・ 加配教員 ・ その他 ())

学級を担任されている先生にお伺いします。
 障害児学級に在籍している児童、または通級など障害児学級から支援を受けている児童は学級に何人いますか。
 () 人程度
 上記以外で、学習面や行動面で気になる児童は学級に何人程度いますか。
 () 人程度

【調査実施機関】
 帝塚山大学 心理・教育推進室

質問 1.

(1) 現在までに、先生が活用されたことのある学生サポーターの活動(内容・形態)の項目番号を○でお囲み下さい。活用されなかった場合、「9. 学生サポーターを活用したことがない」を選択して下さい。(複数回答可)

【活動内容】

1. 学習指導のサポート
2. クラブ活動のサポート
3. 学校行事のサポート
4. 障害児のサポート
5. 不登校児・別室登校児のサポート
6. 気になる児童のサポート
 (例：教室を飛び出してしまう／感情のコントロールが難しい／友人関係でトラブルがある／家庭に問題を抱えている児童などへのサポート)
7. 心理面でのサポート
 (例：休み時間に相談室や空き教室を開放して、児童の相談にのったり、話したり、遊んだりして過ごすなど)
8. その他 ()
9. 学生サポーターを活用したことがない

【活動形態】

1. クラスへの入り込みによる対応
2. 別室・相談室での対応
3. 登下校支援
4. その他 ()

(2) 学生サポーターはどのような点で先生方や子どものお役に立ちましたか(良かった点)。また、改善して欲しいと思った点はありませんか。
 ・良かった点

・改善点

質問2. 現在、先生の学級(学校)で学生サポーターを必要だと感じられますか。以下の項目より当てはまる項目番号を○でお聞下さい。

1. かなり必要である
2. 必要である
3. あまり必要ではない
4. 全然必要ではない

その理由をお聞かせ下さい。

質問3. 今後、もし先生の学級(学校)で学生サポーターを活用するならば、どのような活動を希望されますか。活動の内容と形態に関して当てはまる項目番号を○でお聞下さい。(複数回答可)

【活動内容】

1. 学習指導のサポート
2. クラブ活動のサポート
3. 学校行事のサポート
4. 障害児のサポート
5. 不登校児・別室登校児のサポート
6. 気になる児童のサポート
(例：教室を飛び出してしまふ／感情のコントロールが難しい／友人関係でトラブルがある／家庭に問題を抱えている児童などへのサポート)
7. 心理面でのサポート
(例：休み時間に相談室や空き教室を開放して、児童の相談にのったり、話し合い、遊んだりして過ごすなど)
8. その他 ()

【活動形態】

1. クラスへの入り込みによる対応
2. 別室・相談室での対応
3. 登下校支援
4. その他 ()

質問4. 学生サポーターに具体的にどの程度、活動して欲しいと思われませんか。当てはまる項目番号を○でお聞下さい。また()には、先生がそのようにお考えになった理由や、ご意見などお聞かせ下さい。

(1) 活動日数 【ア. 週1～2回 イ. 週3～4回 ウ. 毎日】
活動時間数 【ア. 1～2時間 イ. 3～4時間 ウ. 全日】
(理由等：)

(2) 時間帯 【ア. 午前 イ. 午後 ウ. 給食 エ. 休み時間 オ. 放課後】
特にサポートを必要とする教科
【ア. 国語 イ. 算数 ウ. 生活 エ. 体育 オ. 音楽 カ. 図工
キ. その他 ()】 (複数回答可)
(理由等：)

(3) 同じ時間帯に必要な学生サポーターの人数
【ア. 1人 イ. 2人 ウ. 3人以上】
(理由等：)

質問5. 学生サポーターに気をつけてもらいたいことや望むことは何ですか。

質問6. 最後に、学生サポーターに関する疑問やご意見などご記入下さい。

先生方からの貴重なご意見を今後の学生サポーターの活用に活かしていきたいと思えます。ご多忙中、ご協力頂きましたことに深く感謝致します。ありがとうございます。